



Title	東日本における布掘り柱掘形をもつ掘立柱建物
Author(s)	高橋, 浩二
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 151-160
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105037
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

東日本における布掘り柱掘形をもつ掘立柱建物

高橋 浩二

はじめに

掘立柱建物のうち、基礎に複数の柱を埋め立てるための溝状の掘形である布掘り柱掘形が認められるものを「布掘り柱掘形をもつ掘立柱建物」（以下、布掘り柱掘形式建物）と呼び、本稿では弥生から古墳時代の例を扱う。布掘り柱掘形は、主に地中梁を敷設する目的または柱筋の地盤改良のために掘り窪められたと考えられており（浅川ほか 2018 など）、よって堅固な構造を示すことから、建物の性格として高床倉庫と想定されることが多いものである。

この布掘り柱掘形式建物について、筆者は日本海側の山陰と北陸に集中することを明らかにした（高橋 2019・2022）。一方、少数だが北部九州、瀬戸内から畿内にかけても認められ、さらに東は東海地方から関東周辺、東北南部まで散発的に分布している。本稿はこれらのうち、東日本の太平洋側における類例を検討し、分布や変遷、系譜関係、さらには建物の性格などについて考えるのが目的である。

1. 類例の紹介

（1）東海西部の例

①三重県高茶屋大垣内遺跡 SB361・SB363（三重県埋蔵文化財センター 2000） SB361 は桁行 4 間（8.6 m）、梁行 2 間で、片側にのみ独立棟持柱をもつ。棟持柱のある主軸線で反転すると、梁行の長さは 7.4 m 程で、床面積は推定で 63.6 m² となる。これは東日本の類例中、最大のものである。この遺構の上には各柱穴を掘り込む形で同規模の SB362 が重複する。SB362 は布掘り柱掘形式ではないが、SB361 とは逆方向の西側のみに独立棟持柱が伴う。SB363 はこの北側に柱筋を揃えて近接する建物であり、桁行 4 間（8.0 m）、梁行 2 間（6.6 m）で、やはり片側にのみ独立棟持柱をもつ。これら 3 棟はいずれも高床式で、独立棟持柱が付く方向の共通性などから、SB362 と 363 の併存が想定されている。また、SB362 の東側には桁行 4 間（8.3 m）、梁行 2 間（5.8 m）で、西側に庇が付く掘立柱建物 SB364 がやはり柱筋を揃えて存在する。なお、SB361・SB363 はともに布掘り柱掘形の底面が凹凸を呈し、Ⅱ類に属するものと考えられる。

SB361 の周囲には幅 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.4 ～ 0.6 m の溝（SA305）が南北 40 × 東西 32 m

の長方形に巡り、竪板塀跡と考えられている。SB361はこの方形区画の中央に単独で存在する。また、SB362～364の周りにも南北46×東西55m以上の二重の溝(SA309・314)が巡り、竪板塀で取り囲まれる。上記のように掘立柱建物とその周りを取り囲む方形区画は2時期に分けられ、区画溝出土のS字甕等から、古墳時代前期前半に比定することができる。性格については祭祀施設や倉庫とは考え難く、豪族居館や公的施設の可能性が想定されている。

②愛知県石堂野遺跡 SB23 (愛知県埋蔵文化財センター 1987) 桁行3間(6.0m)、梁行2間もしくは1間(4.2m)の建物である。布掘り柱掘形は削平で途切れ、縦断面層位も示されていないが、底面が凹凸を呈しており、Ⅱ類に属するものとする。報告書では中世の遺構とされているが、根拠が不明確な上、欠山式期～元屋敷式(古)期(弥生時代終末期前半～後半)の一辺7mで調査区内最大の竪穴建物SB02と主軸を揃えて隣接することから、この時期に遡る可能性があるものとして取り上げる。

③愛知県石座神社遺跡 3300SB・6000SB・6100SB (愛知県埋蔵文化財センター 2015) 3300SBは桁行4間(6.6m)、梁行1間(4.8m)、6000SBは桁行3間(5.1m)以上、梁行1間(5.0m)、6100SBは桁行4間(6.6m)、梁行1間(4.5m)で、遺跡内では大型の掘立柱建物とされている。いずれも布掘り柱掘形は底面が凹凸を呈するもので、3300SBはⅡ類に属するが、6100SBは布掘り柱掘形埋土を掘り込む壺掘り柱掘形が確認できることからⅢ類とする。6000SBもⅢ類の可能性が考えられる。3300SBは丘陵頂部の平坦面に、他2棟は丘陵頂部北東の縁辺にあり、とくに3300SBは壁立ち式の地域最大の竪穴建物と方位を揃えて隣接し、集落の中心施設を構成する。時期は6100SBが石座神社7期⁽¹⁾(弥生時代終末期後半)頃、3300SBが同9～10期(古墳時代前期前半)、6000SBが同10期頃に比定されている。

(2) 東海東部の例

④静岡県天王中野遺跡 SH01 (浜松市文化財協会 1997) 桁行3間(4.9m)、梁行1間(3.4m)の建物である。布掘り柱掘形は縦断面層位が示されていないが、底面が凹凸を呈しており、Ⅱ類に属するものとする。報告書では高床倉庫と推定されている。弥生時代後期の土器片が出土したことから同時期に比定されているが、欠山式期の掘立柱建物SH09の上部に重複しており、この時期を含めてやや降る可能性をもつ建物とする。

⑤静岡県勾坂中下4遺跡 SB-3・SB01 (磐田市教育委員会 1995・2011) SB-3は桁行5間(6.4m)、梁行1間(3.3m)の建物である。布掘り柱掘形の底面は平坦だが、掘形内を版築状に埋め戻した後、壺掘り柱掘形を施す状況がうかがえることからⅢ類とする⁽²⁾。調査区内で最高所に位置し、これを取り巻くように複数棟の竪穴住居が建ち並ぶ。SB01は桁行4間(4.8m)、梁行1間(3.0m)の建物である。布掘り柱掘形は東側のみに認められ、その下部から壺掘り柱掘形が施されていることから、Ⅱ類に属するものと言える。二つの建物とも時期的根拠に欠

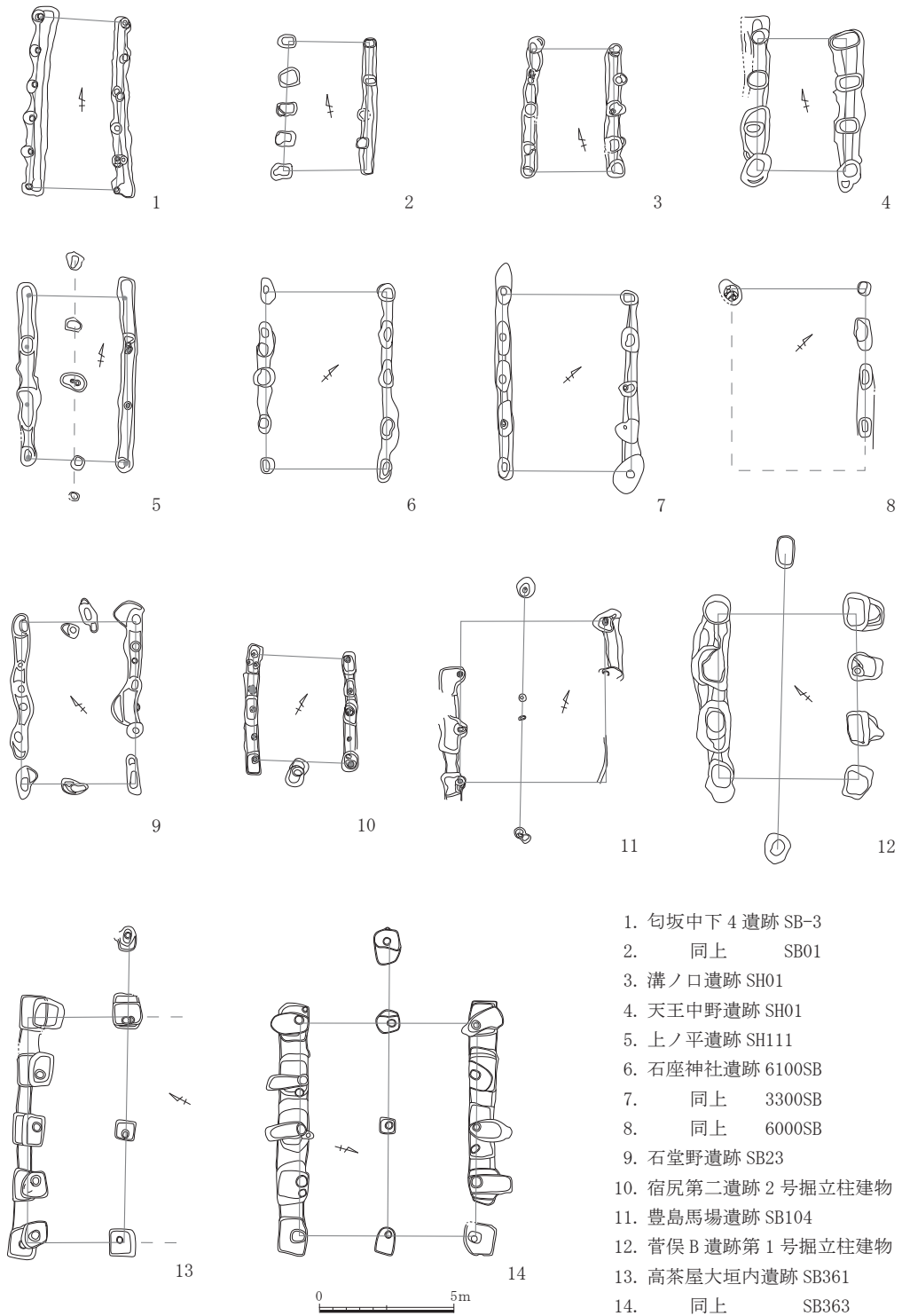


図 1 布掘り柱掘形式建物の類例

けるが、報告書によれば遺跡出土の土器は菊川式中段階が主で新段階の要素が見られること、またこの段階の竪穴住居が認められ、各遺構の時期にはそれほど隔たりがないとされることから、菊川式中～新段階（弥生時代後期後半～終末期前半）頃とする。

⑥静岡県溝ノ口遺跡 SH01（掛川市教育委員会 2000） 桁行 4 間（4.5 m）、梁行 1 間（3.1 m）の建物である。布掘り柱掘形は縦断面層位が示されていないが、底面が凹凸を呈しており、Ⅱ類に属するものとする。他にも同規模の掘立柱建物が主軸を揃えて隣接しており、これらとともに共同管理の倉庫と考えられている。時期的根拠に乏しいが、周囲を取り巻く竪穴住居は菊川式中段階の時期に頻繁に建て替えが行われ、掘立柱建物のほとんどは菊川式中～新段階に比定されており、本稿でも同時期のものとして扱う。

⑦静岡県上ノ平遺跡 SH111（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008） 桁行 3 間（6.1 m）、梁行 1 間（3.75 m）の建物である。両側に独立棟持柱をもつ可能性が指摘されているが不明確である。布掘り柱掘形は、その埋土を掘り込んで柱位置を壺掘りする様子が複数箇所で見られることから、Ⅲ類とする。報告書において、SH111 は大型掘立柱建物の 3B に分類され、3B は菊川式新段階に主体となることから、本稿でもこの段階を中心とする時期のものとして扱う。

（3）関東周辺の例

⑧山梨県宿尻第二遺跡 2 号掘立柱建物（韮崎市教育委員会 2004） 桁行 2 間（4.0 m）、梁行 1 間（3.6 m）の建物である^③。布掘り柱掘形は縦断面層位が示されていないが、底面が凹凸を呈しており、Ⅱ類に属するものとする。本建物は重複する 2 基の竪穴住居跡の間に挟まれ、両竪穴とも報告書でⅡ期頃に比定されている。Ⅱ期は S 字状口縁台付甕 B 類～C 類の段階にあたり、よって本建物も概ね古墳時代前期前半に位置づけることができる。

⑨東京都豊島馬場遺跡 SB104（東京都北区教育委員会 1999） 桁行 3 間（6.0 m）、梁行 1 間（5.4 m）で、両側に独立棟持柱をもつ建物である。布掘り柱掘形は縦断面層位が示されていないが、底面が凹凸を呈しており、Ⅱ類に属するものとする。壺掘り柱掘形 3 基には柱痕が遺存する。SB104 からは S 字状口縁台付甕が出土していることから、弥生時代終末期後半～古墳時代前期前半に位置づける。本遺跡は方形区画の遺構が確認されている点でも注目できる。

⑩福島県菅俣 B 遺跡第 1 号掘立柱建物（いわき市教育委員会 2003） 桁行 3 間（6.2 m）、梁行 1 間（5.2 m）で、両側に独立棟持柱をもつ建物である。片側だけ確認された布掘り柱掘形は縦断面層位が示されていないが、底面が凹凸を呈しており、Ⅱ類に属するものとする。ここでは 2 時期の方形居館が確認されている。第 1 号掘立柱建物は居館 2 期（古墳時代前期中葉）に帰属するもので^④、二重柵列による東西最大 72 m、南北最大 51 m の方形区画内に、同 1 期から引き続き壁立ち式で大型の第 3 号竪穴住居（一辺 10.5 m）と主軸を揃えて併存する。このような建物構成や出土遺物等から、本建物は倉庫のみでなく、祭殿を兼ねたと推定されている。

以上、いずれも布掘り柱掘形は桁行の柱筋にのみ施され、梁行には認められない。桁行は2間が1例、3間が5例、4間が7例、5間が1例で、1間のものは存在しない。梁行はほとんどが1間で、2間であることが確実な高茶屋大垣内遺跡の2例はともに梁行長が6.5 mを越える大きな建物である。また、確実に独立棟持柱を伴うものは4例と多い。これらはいずれも梁行の長さが4.0 m以上で、梁行が長い傾向がみられる。なお、総柱構造のものは認められない。

2. 時期的消長と系譜

今回取り上げた中で最も古いのが勾坂中下4遺跡 SB-3・SB01 や溝ノ口遺跡 SH01 のいずれも東海東部の3例で、これらは弥生時代後期後半まで遡る可能性をもつ。同じ東日本でも日本海側の北陸では中期後葉から末葉に遡って出現し、後期後半は類例が増加しはじめる段階にあたる。よって東日本の太平洋側では当該建物が遅れて出現すると言える。

弥生時代終末期前半を中心とする時期のものには天王中野遺跡 SH01 と上ノ平遺跡 SH111 の2例、そして終末期前半～後半におさまるものには石堂野遺跡 SB23 と石座神社遺跡 6100SB の2例がある。また、古墳時代前期にかかるものには豊島馬場遺跡 SB104、高茶屋大垣内遺跡 SB361・SB363、石座神社遺跡 3300SB・6000SB、宿尻第二遺跡2号掘立柱建物、菅俣B遺跡第1号掘立柱建物の7例がある。今のところ確実に古墳時代前期後半に降る例は認められない。

分布をみると、弥生時代後期後半～終末期前半には東海東部まで広まる。東海西部には同時期に遡る類例は認められないが、滋賀県では下鉤遺跡などでこの時期の例が確認されている。関東周辺では終末期後半まで遡る可能性をもつ豊島馬場遺跡例が最も古く、菅俣B遺跡例はさらに新しい古墳時代前期前半のもので、東にいくにしたがい出現が遅れる傾向がうかがえる。

次に布掘り柱掘形の分類別にみると、Ⅱ類が10例と最も多い。関東周辺の3例もⅡ類である。

表1 各類例の時期（前後する時期にかかる可能性がある場合は点線で示す）

遺跡・遺構名称	弥生時代後期後半	弥生時代終末期前半	弥生時代終末期後半	古墳時代前期前半
高茶屋大垣内SB361				
同上 SB363				
石堂野SB23				
石座神社6100SB				
同上 3300SB				
同上 6000SB				
天王中野SH01			---	
勾坂中下SB-3				
同上 SB01				
溝ノ口SH01				
上ノ平SH111	---		---	
宿尻第二2号掘立柱建物				
豊島馬場SB104				
菅俣B第1号掘立柱建物				

他にはⅢ類と考えられるものが4例存在するのみである。両者はともに弥生時代後期後半～古墳時代前期前半にかけて確認されており、とくに時期差は認められない。なお、Ⅰ類は勾坂中下4遺跡SB－3例がその可能性を残すものの、東日本の太平洋側では極めて少ないことが見て取れる。全国的にもⅠ類は山陰と北陸の日本海側に分布が偏ることが特徴である。

東日本では石川県金沢平野周辺において全国最多の類例が確認されているが、上記のような点から当該建物の伝播経路を推定すると、北陸から飛騨や信濃など内陸ルートを経て伝わったとするより、太平洋側を東へすすみ関東周辺に到達したと考えるのが妥当と思われる。

3. 規模の比較

金沢平野の例だが、当該建物に関しては新しくなるにしたがって梁行が拡張する傾向が指摘されている（出越 1995）。この点に関連して検討してみよう。

図3は桁行の長さが不明な石座神社遺跡6000SBを除く類例の平面規模を示したものである。桁行の長さで示すと、4m台と6m台、8m台のところにまとまりが認められ、5m台と7m台が切れ目となる。ただし、全国的には5m台や7m台にも多くの類例が存在するため、本稿では明確な基準を用いて分類することはしないが、便宜的に4m台とそれより小さなものを中・小型、6m台のものを大型、8m台のものを特大型とする。それでは段階ごとに見ていこう。

弥生時代後期後半～終末期前半を中心とする段階の5例は、桁行長4.5～6.4m、梁行長3.0～3.75mの間にさまる。出現当初の段階から大型のものが認められ、中・小型のものとの

間に規模の差が生じていることが分かる。また、梁行に対する桁行の長さ、つまり桁行長÷梁行長の比率（以下、桁行比）は、いずれも1.5前後～2.0の間にさまる。

弥生時代終末期前半～後半段階の2例は、ともに桁行長が6m台の大型のものである。また、この段階から梁行長が4mを越えるものが認められるようになる。桁行比は1.43～1.47で、1.5を越えるものは認められないが、前段階の天王中野遺跡や溝ノ口遺跡例と比べて桁行比に大きな変化は見られない。

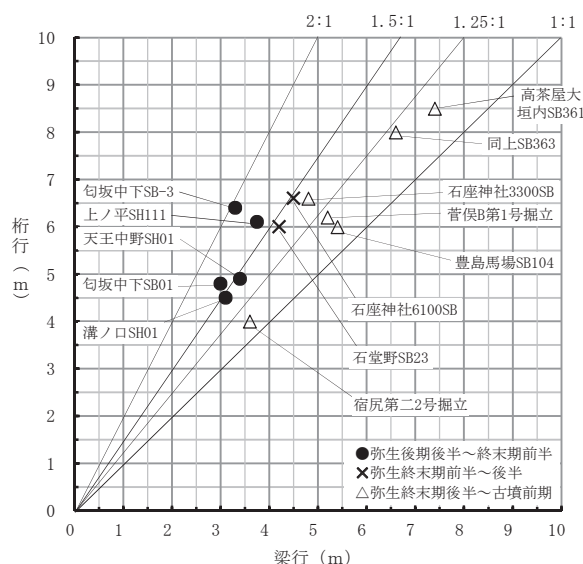


図2 各類例の平面規模

古墳時代前期にかかる段階の6例は、桁行長4.0～8.5 m、梁行長3.6～7.4 mの間におさまる。特大型、大型、中・小型の3種が認められる。梁行長はほとんどが4 mを越えるが、宿尻第二遺跡例のように3 m台にとどまるものもある。しかし桁行比をみると、石座神社3300SBだけは1.38を測るが、他はいずれも1.25以下に変化していることが分かる。

このように、当該地域においては出現当初から中・小型と大型の規模差が認められ、さらに古墳時代前期には高茶屋大垣内例のように特大型のものが現れる。また、梁行の長さに着目すると、弥生時代終末期前半～後半の段階からは大型の建物の中に4 mを越えるものが多数認められるようになる。桁行比はどうであろうか。弥生時代後期後半～終末期前半を中心とする段階には1.5を越える建物が複数存在するのに対し、終末期前半～後半の段階からはこの数値を越えるものは認められなくなり、さらに古墳時代前期に入るとほとんどが1.25を下回るようになる。桁行比の値が小さくなるのは梁行長が伸びることに起因するものであり、つまり当該地域においても新しくなるにしたがって、おおよそ梁行の拡張化傾向が認められると言える。

4. 建物の性格

当該建物の性格等に関しては、最初期の調査例である石川県塚崎遺跡の報告以来（小嶋1976）、高床倉庫または倉庫とする見解が大半である。一般的な掘立柱建物に対し、布掘り柱掘形式建物は堅固な基礎構造を備えることから、堅牢で恒久的な役割が期待される高床倉庫と考えられることが多いからだと思われる。

あらためて建物の性格を考えてみたい。その手がかりとして、浅川滋男らが鳥取県松原田中遺跡の例を検討する中で、梁間3.0 m未満の掘立柱建物は高床倉庫とみなすべきで、布掘り柱掘形式建物の場合は基礎構造が堅固なことから、布掘建物1のような梁間3.3 mのものも常識的には高床倉庫と考えるべき一方、布掘建物0は梁間が4.0 mと長いことなどから、平屋建もしくは屋根倉の形式と判断していることは参考になるであろう（浅川ほか2018）。

本稿で言及した中で、弥生時代後期後半～終末期前半段階には、中・小型と大型の例があるが、いずれも梁行が3.0 m台にとどまる。梁行1間あたりの規模が短くおさえられることから、高床倉庫と考えるのが妥当と言える。これらの遺跡において布掘り柱掘形式建物は居住域に近接してつくられており、堅穴住居の居住者に共同で使用されるものであったと考えたい。

一方、弥生時代終末期前半～後半段階以後は、梁行が4.0 mを越えるものが9例中8例と多数を占める。石座神社遺跡の7期の例を見ると、丘陵頂部を占める集落中心部に建てられた4棟の大型堅穴住居のうち1棟（5634SI）に布掘り柱掘形式建物6100SBが近接する。主軸がほぼ一致することからも両建物の強い関係性が見て取れる。同時期には、集落中心部西側の緩斜面部に小型の掘立柱建物3棟（4900SB・5200SB・5300SB）が建ち並び、倉庫群と想定されてい

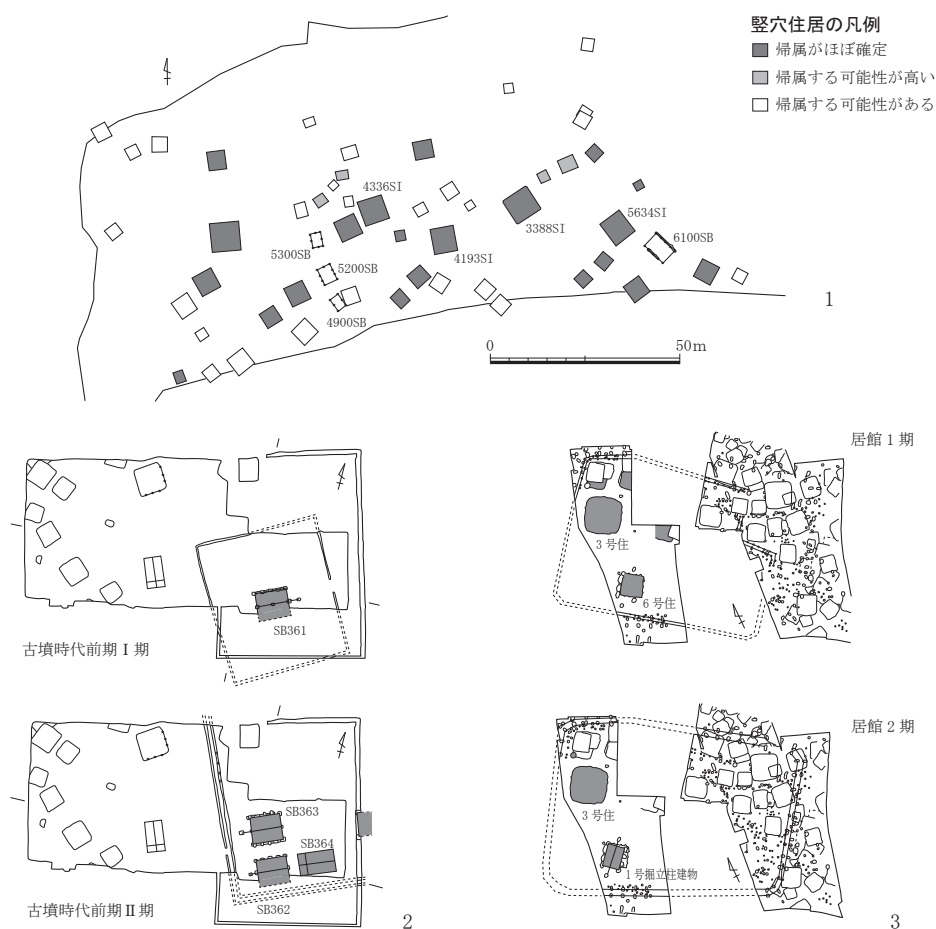


図3 各類型の建物構成（1：石座神社遺跡7期、2：高茶屋大垣内遺跡、3：菅俣B遺跡）

る⁽⁵⁾。3棟は主軸をほぼ揃えることから、点在する個々の竪穴住居にそれぞれ伴うのではなく、集落全体の倉庫関連施設であり、翻って6100SBはこれとは別の性格をもつ建物と考えたい。9～10期に比定される3300SBも集落中心部に建ち並ぶ壁立ち式の大型竪穴住居（3149SI）などと主軸を揃えて近接する。同様の事例は石堂野遺跡でも認められる。ここでは布掘り柱掘形式建物SB23と大型竪穴住居SB02が主軸方向を揃えて近接する。早野浩二はこれらに直線的な柱列が伴い、集落の中心施設を構成することを想定している（早野 2015）。両遺跡例が示すように、この段階には集落内で中核となる建物群が顕在化する。それらの建物群と強く関係するように存在する布掘り柱掘形式建物は、共同使用の倉庫とは異なる使用主体が考えられるだろう。

さらにまた、4例が独立棟持柱をもつものであり、かつ方形区画を伴う点でも注目される。高茶屋大垣内遺跡では、古墳時代前期Ⅰ期において竪板塀と考えられる方形区画の中央にSB361が単独で存在する。続くⅡ期にも竪板塀による二重の方形区画内に、SB363が大型の掘

立柱建物2棟と主軸を揃えて併存する。このように堅板塀で遮蔽、管理された空間が創出され、その内部に布掘り柱掘形式建物が建てられる。堅穴住居はその外側にやや距離をおいて多数確認されており、居住域と方形区画空間とが明確に区別されていることが分かる。

菅俣B遺跡でも2時期の方形区画が確認されている。居館1期（古墳時代前期前葉）には方形柵列内に、一辺10mを越える壁立式の第3号堅穴住居があり、やや距離をおいてこれに次ぐ規模の第6号堅穴住居が並び立つ。3号住居は周辺空間を広く占有することからも、執政者の住まいと考えられている。6号住も集落内では数少ない壁立式で、やはり他の建物が近接しない。ここからは鳥形や革袋状とみられる土製品をはじめウバ貝に入った漆塊、土鈴など特異な遺物が出土しており、祭儀用の建物と考えられている。続く居館2期（古墳時代前期中葉）には、3号住はそのままだ、6号住が布掘り柱掘形式の第1号掘立柱建物に建替わる。やはり近接する建物はなく広い空間を占有しており、祭祀施設としての継続性が見て取れる。居館2期には周りを取り囲む柵列の柱穴も1.0～1.5mと倍以上に大きくなり、柵列自体も拡張して長方形化する。方形区画が大規模に整備されるとともに、祭祀空間も更新されたことが読み取れる。大型堅穴住居に付随して存在する布掘り柱掘形式建物も、集落のリーダーに管理されるものであったと判断できるだろう。豊島馬場例については居住域の様相が不明確だが、遺跡内には方形区画で囲まれた空間も確認されており、高茶屋大垣内遺跡や菅俣B遺跡例に近い類例である可能性を考えたい。

ただし、古墳時代前期でも宿尻第二遺跡のように桁行長が4.0mと小型で、梁行長も3.0m台にとどまる、高床倉庫と考えるべき例が少数ながら存在する。多数の堅穴住居に取り巻かれ、また区画施設が未確認であることから、共同使用のものと考えられる。

このように、共同使用の高床倉庫と判断できる例が古墳時代まで存続して認められる一方、弥生時代終末期からは異なる使用主体が想定可能な類例が現れる。それらは石座神社遺跡7期の例が示すように、倉庫群とは別地区に中核的な建物群と関係して存在する例や、有力者の居館と判断できる方形区画内に建てられたものであった。それらはたとえ高床建築であったとしても、共同で用いられたのではなく、集落内の有力者に帰属するものやリーダーに管理されたものと解釈できる。また、祭祀儀礼に関わると考えられている独立棟持柱付きの建物が多く認められる点も特徴的で、これらは高床倉庫とは異なる用途が想定できるだろう。

これらの布掘り柱掘形式建物の中には浅川ほか2018の指摘のように平屋建のものが含まれる可能性も否定できないが、本稿では十分に分析できなかった。また、梁行長4.0mという基準もあくまで暫定的であり、さらなる検証が必要である。今後、全国的な比較をすすめる中で再検討していきたい。

なお、本研究はJSPS科研費JP22K00971の助成を受けたものである。

註

- (1) 報告書では、7期は古墳時代前期初頭とされているが（愛知県埋蔵文化センター 2015：p. 168 の第 33 表）、筆者は布留式以後を古墳時代と考えるため、弥生時代終末期後半と記述する。
- (2) 縦断面層位図が未掲載のため不明確だが、布掘り柱掘形検出時には壺掘り柱掘形が確認されていることから（磐田市教育委員会 1995：写真図版 1 及び同 2011：p. 45）、布掘り柱掘形をいったん埋め戻した後に柱位置を壺掘りするⅢ類に該当すると判断した。仮に壺掘り柱掘形が柱抜取穴にあたる場合はⅠ類に該当するが、東日本の太平洋側では他にⅠ類の類例は確認されていない。
- (3) 報告書では桁行 4 間、梁行 2 間とされているが、布掘り柱掘形の両端と中央に壺掘り柱掘形が掘り窪められ、その間には柱のアタリが確認されるのみで、本稿ではこれを間柱と考える。また、南側梁行に見られる柱穴は柱筋から若干南側へずれるもので、本建物に付随しない可能性が考えられる。
- (4) 報告書では、居館 1 期に帰属する第 6 号堅穴住居に第 1 号掘立柱建物が重複して建てられたと記されているが、出土土器は前者が辻編年Ⅱ－2～Ⅲ－1 期前後に対し、後者はⅡ－1～2 期と矛盾がみられる。しかし、報告書総括では第 6 号堅穴住居は、本遺跡でいち早く出現した住居の一つと強調されていることから、第 1 号掘立柱建物はこれよりも新しい建物と理解しておく。
- (5) このうち 1 棟（5200SB）は桁行 4.5 m、梁行 3.6 m のものであり、浅川ほか 2018 の基準に照らせば、高床倉庫ではなく、屋根倉または平屋建の可能性が考えられるが、ほぼ主軸を揃えて近接して建ち並ぶ様相から、倉庫群またはその関連施設を考えたい。

引用・参考文献

- 浅川滋男・宮本正崇・中田優人 2018「松原田中遺跡の布掘柱掘形と地中梁に関する復元的考察」『松原田中遺跡』Ⅲ 鳥取県教育委員会、鳥取：p. 956、pp. 968-973
- 小嶋芳孝 1976「建物の構造と集落構成」『北陸自動車関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ 石川県教育委員会、石川：p. 251
- 高橋浩二 2019「北陸における布掘り柱掘形をもつ掘立柱建物の出現と展開」『磨斧作針—橋本博文先生退職記念論集—』六一書房、東京
- 高橋浩二 2022「山陰における布掘り柱掘形をもつ掘立柱建物」『石川考古学研究会々誌』第 65 号 石川考古学研究会、石川
- 出越茂和 1995「加賀における弥生終末～古墳中期の村落構造」『上荒屋遺跡』Ⅰ 金沢市教育委員会、石川：p. 263
- 早野浩二 2015「弥生時代後期から古墳時代前期の特徴的な遺構と遺物」『石座神社遺跡』愛知県埋蔵文化財センター、愛知：p. 192

紙幅の関係で発掘調査報告書の文献は割愛せざるを得なかった。ご容赦いただきたい。